$name
==========
THE VEDANTA KYOKAI
日本ヴェーダーンタ協会の最新情報
2004年1月　第2巻　第1号
==========
「皆様にとって2004年が霊性に満ちた素晴らしい年となりますように」
==========
http://www.vedanta.jp/newsletter/2004/008/008Jan04.pdf
（PDFファイル・英語バージョン）
==========
目次
・かく語りき　聖人の言葉
・今月の予定
・ホーリーマザーの生誕祝賀会
・今月の思想
・奈良教授の講話：「ヒンドゥイズムと神道」
・覚えておきたいお話
・スワミジ、熊本を訪問

かく語りき　聖人の言葉

「人は男も女も皆、神である、と考えなさい。あなたには人を救うことなどできない。ただ仕えるだけだ。神の御子や神ご自身に仕えなさい。それは特権なのです。あなたが神の御子に仕えることを神が認めてくださったのだから、神のお恵みです。思い上がってはいけない。他の人にはないのに、あなたにその特権が与えられたのは、神のお恵みです。神に祈りをささげるつもりで人に仕えなさい。貧しい者、不幸な者は、私たちの救いです。体や心を病んだ者、罪人の姿を借りて現れた神に、私たちは仕えることができるのだから。」
スワミ・ヴィヴェーカーナンダ

「ああ、私の無知なる心よ、絶えず神を求めよ。神の憐れみがあって初めて、お前の業（わざ）は遂げられる。常に心に神の御姿を浮かべよ。神の愛によってお前は真実を見出す。神と心を一つにするのだ。」
グル・ナナク

今月の予定

・生誕日
スワミ・トゥリヤーナンダ　1月6日
スワミ・ヴィヴェーカーナンダ　1月14日

・協会の祝賀会
スワミ・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会
1月18日(日)

シュリ・サラダ・デヴィの生誕祝賀会

　シュリ・サラダ・デヴィの正式な生誕日は12月16日ですが、逗子センター(協会) では信者の皆様が参加しやすいように21日 (日) に生誕祝賀会を行いました。数日前から祝賀会の直前まで準備に追われましたが、類まれなる素晴らしきお方の一人である、シュリ・サラダ・デヴィ、ホーリー・マザーの第150回生誕祝賀会が無事執り行われました。
　当日は、12月にしては非常に暖かくよい天気で、母なる自然の暖かい祝福をいただいているかのようでした。協会はお祭りらしいにぎやかな雰囲気に満ち、誰もがにこにこと微笑んでいました。成田空港から到着したばかりのある参加者は、大きく開かれた正面ドアから中に入ると集まった人々にロビーやホールで温かく迎えられ、まるで我が家に帰ったような気がした、と話しています。
こうしたにぎやかな雰囲気は、霊性に満ちた催しが予定されていたからなのでしょう。午前中は恒例の供物の儀式やスワミ・メダサーナンダによるホーリーマザーの講話、午後は奈良毅教授による神道の講話と、当日の予定は誰もが期待する内容となっていました。（「奈良教授の講話：『ヒンドゥイズムと神道』」もご覧下さい)
　いつも通訳をしてくださる伊藤さんがインドに旅行中だったので、奈良教授がスワミの通訳をしてくださいました。スワミのお話では、今回がホーリーマザーの151回目の生誕日、つまり生誕150周年に当たるため、12月16日から一年間、ベンガルのジャイランバティを中心に世界中で祝賀会が行われるとのことです。協会でもこれを記念して、6月に東京・池袋で行われるスワミ・ヴィヴェーカーナンダの生誕祝賀会でホーリーマザーの特別記念書籍を発行するなど、さまざまな形でお祝いしていく予定です。
スワミは集まった人たちに、ホーリーマザーが天の母そのものであることを忘れないように言いました。ホーリーマザーは非常に優れた霊性の持ち主で、単に霊的な勤めに励んだからだとか、シュリ・ラーマクリシュナという霊的な師がいたからだということでは説明できないほどでした。また、シュリ・ラーマクリシュナのほかに彼女の際立った霊性に気付いたのは、スワミ・ヴィヴェーカーナンダとナグ・マハシャヤ（著名な在家の弟子）の二人しかおらず、それ以外の人々がホーリーマザーの真の霊性に気付くにはずいぶんと時間がかかったそうです。
　講話のテーマは「シュリ・サラダ・デヴィとの会話」でした。スワミは、「シュリ・ラーマクリシュナの福音」と「シュリ・サラダ・デヴィの福音」には明らかな違いがあると言いました。「シュリ・ラーマクリシュナの福音」では、シュリ・ラーマクリシュナは常に霊的な話をしており、信者の霊的な質問に答えたり、自ら霊性について語っていました。また、シュリ・ラーマクリシュナはいつも深く霊的な雰囲気をかもし出しており、それは誰の目にも明らかだったそうです。
　一方、ホーリーマザーは、霊的な雰囲気を隠しているかのようでした。彼女の話題のほとんどは、普通の母親と同じように、家族や家のことなど世俗的なことでした。それでいて、霊的な質問を具体的にされると、神の英知に満ちた答えを返しました。実際に、シュリ・サラダ・デヴィは、ラーマクリシュナ教団内のもめごとを裁定する、いわば最高裁判所で、彼女の裁きはいつも自然で単純明快であり、誰もが納得のいくものでした。
　スワミは、最後に、ホーリーマザーの教えを忘れることがあっても、次の言葉を覚えてさえいれば大丈夫だと強く言い、全員を励ましました。「子供たちよ、試練や困難にあったら、私のことを思い出しなさい。私が、あなたのそばであな

たを助け、守り、きっと救ってあげましょう。忘れないでください。」
ここで、昼食(プラサード)の時間となりました。こうした祝賀会ではいつものことですが、食事室と続きの間だけでは全員の席がないので、二階の集会室にもテーブルを出して席を用意しました。すぐに準備が整うと、皆は席について、素晴らしい仲間とともにインドと日本のごちそうを楽しみました。
（編集協力：アシシ・グプタさん、エンリコ・コロンボさん）

当日の写真
http://www.vedanta.jp/multimedia/image/hm2003/index.html

・今月の思想

真の不幸

　激しい感情にとらわれることのない心はまさに要塞である。身をかわして攻撃に立ち向かうのに、これほど堅固な要塞はない。これに気付かぬのは無知だ。だが、これに気付いていながらこの要塞に身を隠そうとしないことこそ真の不幸である。
（マルクス・アウレリウス）

奈良教授の講話　「ヒンドゥイズムと神道」

　12月21日の逗子の月例会では、午後のプログラムとして、清泉女子大学・奈良毅名誉教授による「ヒンドゥイズムと神道」という特別講話が行われました。奈良教授は、英語と日本語の両方でお話をしてくださいました。奈良教授はお話の始めに、午前中行われたスワミ・メダサーナンダジの講話にあった「ホーリーマザーは、さまざまな母の姿を通して現れになる」という言葉を挙げ、おいしい昼食（プラサード）はホーリーマザーが子供たちを通してご準備なされたのだと言われました。
　「聖なる道」「神への道」という意味の神道は、日本人の生活習慣の中に溶け込んだ宗教ですが、特定の人間が起こしたものではありません。どのくらい前に生まれたのか分かっておらず、教えをまとめた聖典も特にないそうです。神道の元々の儀式は自然や祖先の崇拝に関係しています。神社には偶像がないかわりに石が置かれますが、その石には普遍の精霊が宿っているのです。また、神社の敷地は木々で聖別され敷地内は清められた場所だと考えられています。興味深いことに、科学者らの研究では、神社内の波動は外部と違っているそうです。
　また、神道では真実、純粋な存在である普遍の精霊と通じ合うことが非常に重要で、古代では神道の長である天皇しか知らない神秘の儀式があり、おそらく今日まで伝えられているのではないかということでした。
　神道とヒンドゥイズムを比べてみると、神道にはヒンドゥイズムと違って魂の輪廻転生という概念はありません。ですから、魂は死後、いくつかの段階を経て最後には神と合一します。一方、神道には尊（みこと）と呼ばれる人々がいて、これはヒンドゥイズムのジヴァンムクタの存在に似ています。
　講話の後は、短い質疑応答に続いて、シャンティさん（いずみだかおりさん）とサムドゥラグプタさんがバジャン（賛歌）を歌われ、その後皆で瞑想をしました。紅茶と軽食をいただき、充実した一日を過ごした参加者は喜びに満たされて

協会を後にしました。
（編集協力：アシシグプタさん)

忘れられない物語

道は自分で歩かねばならない

　インド北部の町・スラヴァスティに、ブッダはダルマの教えを説くセンターを開きました。人々はそこに来て、瞑想したり教えに耳を傾けたりしていました。その中の一人の若者は、毎晩教えを聞きにやって来ました。若者は四年間通い続けていましたが、その教えを実践することはありませんでした。
数年後のある晩、少し早い時間にやってきた若者は、ブッダが一人でいるのを見つけました。若者はブッダに近づいて言いました。「先生、私の心にはたえず疑問が浮かんでいます。疑いが消えません。」
　「ダルマの道に疑いなどない。疑念を晴らしてあげよう。何を聞きたいのだね。」
　「先生、私はこれまで何年もセンターに通ってきました。多くの世捨て人、僧や尼僧を見、世俗の信徒もたくさん見てきました。先生のもとに通い続けた人々の中には、最後のレベルに達して完全に解放され自由になった人がいました。また、ある程度解放され、人生が変わった人もいました。でも先生、私も含めて多くの人は何も変わっていない。それどころか、かえってひどくなった。ちっとも良くなってないんです。」
　若者は続けた。「なぜなんです、先生。あなたは、偉大なお方だ。英知に満ち、思いやりにあふれ、力がみなぎっている。先生のそのお力や思いやりの心で、なぜ、あなたのもとに来る人々すべてを自由にしてあげないのですか。」
　ブッダは微笑んで言いました。「若者よ、住まいはどこだね。生まれは？」
　「このスラヴァスティに住んでいますよ。コサラ州の首都だ。」
　「それは今の住まいだろう。お前の顔つきはこのあたりの出身ではない。出身は？」
　「ラジャグリハの町です、先生。マグダ州の首都ですよ。スラヴァスティには数年前に来たんです。」
　「ラジャグリハに親戚や友人はいないのかね。」
　「いますとも。私はそこで商売をやっていますから。」
　「では、スラヴァスティからラジャグリハにはよく行くんだね。」
　「はい、先生。毎年何回も行き来していますよ。」
　「それじゃあスラヴァスティからラジャグリハへ行く道はよく知っているだろうね。」
　「そりゃあもう。目隠しされてもラジャグリハまで行けますよ。何度も歩いた道だ。」
　「お前をよく知る友人は、お前がラジャグリハの出身で今はこの町に住んでいるのを知っているね。お前がラジャグリハとスラヴァスティをしょっちゅう行き来して、道に詳しいことも。」
　「もちろんですよ。親しいやつはみんな知っています。」
　「では、中には、お前にラジャグリハへの行き方を聞いてくる者もいるだろう。お前は包み隠さず、道を教えているのだろうね。」
　「隠すだなんて。きちんと説明してやりますよ。まず東に行ってそれからバナラスの方へ行くんです。そこからはガヤまでずっと歩き続ける。そうすればもう

ラジャグリハだ。こうやって分かりやすく言ってやるんですよ、先生。」
「では、教えてやった者は皆、ラジャグリハに行けるね。」
「まさか、先生。最後まで歩き続けた人だけですよ、ラジャグリハまで行けるのは。」
「それだよ、私が言いたかったのは。人は私のもとにやって来る。この人はニルヴァナまでの道を行った人だから、その道を完全に知っているに違いない、とね。彼らはやって来てこう尋ねる。『ニルヴァナへの道、自由への道とはどんな道でしょう。』私は包み隠さず話してやる。『これがその道です』と。だが、もしその人が『よく分かりました。なんて素晴らしい道なんだ。でも私はわざわざ行こうとは思いません』と言えば、それまでだ。その人はゴールにたどり着くことはない。」
ブッダは続けた。「私は人を肩に背負ってゴールまで連れて行ったりはしない。そんなことは誰にもできないのだ。せいぜいしてやれるのは、愛と思いやりをもって、こう言ってやることだけだ。『これがその道です。私はこうやって歩いたのです。あなたもがんばって歩けばゴールまでたどり着けるんですよ』とね。だが、皆自分で、自分の足で、歩かねばならないのだ。一歩進んだ者は、ゴールに一歩近づく。百歩歩いたものは百歩近づく。最後まで歩いた者だけがゴールにたどり着けるのだ。道は自分で歩かねばならないのだよ。」
（「Early Buddhist Tradition (Soul Food 出版、J. Kornfield、C. Feldman 共著)」より）

スワミ・メダサーナンダ、熊本を訪問

熊本在住の信者である梶原さん、大島さん、稲葉さんのお招きで、スワミ・メダサーナンダは、11 月 29 日から 12 月 1 日まで毎年恒例の熊本訪問を行いました。
訪問2 日目の例会はほぼ丸一日の予定で行われ、35 名ほどの人が集まりました。講和の題は「神の喜びの道」で、参加者は皆一心に聞き入っていました。講話の後は熱心に質疑応答が交わされました。例会の通訳は協会の長年の信者の稲葉さんで、今回も、この重要な役目を立派に果たされました。
特に素晴らしかったのは、子供たち（男の子四人と女の子一人）の歌でした。この歌は、ホーリーマザー・シュリ・サラダ・デヴィを歌った日本語の歌「私のお母さん」で、協会の泉田香穂里さん（シャンティさん）が作詞・作曲しました。伴奏はギターとフルート、指揮は稲葉さんでした。また、まさきさんは、ご主人が作曲された美しい歌を披露してくださいました。
こうした歌に信者の皆さんが取り組まれるのはすばらしい進歩であり、日本語の賛歌がこれからも増えていくのではないかと期待しています。

発行：日本ヴェーダーンタ協会
249-0001　神奈川県逗子市久木 4-18-1
Tel：046-873-0428　Fax：046-873-0592
website: http://www.vedanta.jp　email: info@vedanta.jp
[KENB008J]